



Vol. 61

## CONTENTS

【コラム】全高情研（ぜんこうじょうけん）… 能城 茂雄

【解説】近隣地域の公立学校と連携した教育の情報化に対応できる教員の養成… 藤原 裕 加藤 直樹

【解説】情報科教員を目指す学生さんに向けたガイダンス会… 谷川 佳隆

## COLUMN



### 全高情研（ぜんこうじょうけん）



皆さんは、全高情研（ぜんこうじょうけん）という組織をご存じでしょうか？ 全高情研は「全国高等学校情報教育研究会」の略称で、高等学校で教科「情報」を教えている教員の情報交換を目的とした団体です。

高校の情報科は2003年に導入され、必修修<sup>☆1</sup>となりました。当初は数学や商業など他教科の教員が研修を経て担当することが多く、手探りで授業を行っていました。そこで、都道府県など地域ごとに、勉強会が行われています。

2008年からは、地域ごとの研究会が連携し、全高情研を組織しました。本稿執筆時点の加盟数は、都道府県22団体、政令指定都市1団体、私学2団体の25団体となっています。全高情研では、高等学校の情報教育関係者が集い、情報に関する発表や研究協議を定期的に行うとともに、研究会のネットワークを全国に広げ、互いの情報交換を活発にし、交流を深めています。

全高情研では毎年各地で大会を開催し、今年（2016年）で9回目を迎えます。2008年8月に開催された第1回大会から、毎年8月に全国各地で大会を開催しています。今年も「第9回全国高等学校情報教育研究会全国大会（神奈川大会）」が、8月8日～9日の2日間、専修大学で開催されます。情報教育にかかわる研究者や学生の皆様も参加していただけます。ご参加をお待ちしております。

	大会テーマ	会場
第1回大会	Next Stage—新たに広がるネットワークの構築—	武蔵工業大学
第2回大会	ICTコンパス—あふれる情報の波を乗りこなす—	筑波学院大学
第3回大会	ICTコンパス—新たなる風—	金沢工業大学
第4回大会	ICTコンパス—風を受け新たな一歩を踏み出す—	大阪経済大学
第5回大会	情報教育の未来をデザインする	東京情報大学
第6回大会	教科情報11年目の進展～情報教育の深化～	京都大学
第7回大会	輝く未来を創る情報教育～新しいメディアへアプローチ～	東洋大学
第8回大会	地域課題に向きあう情報教育～地方からの挑戦～	宮崎公立大学
第9回大会	情報教育の本質を見極める～挑戦し続ける現場からの発信～	専修大学

能城茂雄（東京都立三鷹中等教育学校）

☆1 必修修科目は、卒業までに学校の定めた教育課程にしたがって履修しなければならない科目。

# 近隣地域の公立学校と連携した教育の情報化に 対応できる教員の養成

藤原 裕 加藤直樹

東京学芸大学

## 教育の情報化に対応できる教員の養成の現状

これからの社会で必要とされる人材育成の見直しが進められ、初等中等教育における情報教育と教育・学習活動におけるICT<sup>☆1</sup>の活用(これに校務の情報化を加えたものを“教育の情報化”と呼ぶ)が改めて重要視されている。当然のことながら、現場の教員には、これらを実施する能力が求められ、文部科学省から出された教員の資質能力の向上に関する中間まとめでも、その記述が目を引き<sup>1)</sup>。しかし、すべての教員が意識して取り組むべきことがらにもかかわらず、高校普通教科情報の専門教員養成以外の教員養成機関において教育の情報化を実施する力を育成する体制はまだ十分とはいえない。

教員の養成において重要な要素なのが教育実習(教育実地研究)である。教育実習は、実際の教育現場の体験を通して大学で学んだ知識・技術の体系化や自らの研究課題の発見のための重要な学びの機会である。教育の情報化、特にICT活用の実践力の育成でも、大学で学んだ理論や方法論を児童・生徒を前にして実践する唯一の機会となる。しかし、教育実習におけるICT活用実践のためには、実習先に機材を揃えることや、実習生を指導する立場の教員がICT活用を円滑にできることが必要であり、大学のカリキュラムを整える以上に難しい面がある。

そこで、各大学でも附属学校のICT活用環境の整備を進めており、和歌山大学教育実践総合センターと附属学校が連携した取り組み例<sup>2)</sup>を始め、教育家庭

新聞(2014年9月1日)には、いくつかの事例が紹介されている。信州大学では、教育実習生にICTを活用した授業をすることを義務づけるという取り組みを始めている<sup>3)</sup>。筆者らが所属する東京学芸大学(以下、本学と記す)でも、教育の情報化に対応できる教員の養成のために、教育実習でICTを活用した授業を実践させる試みを行っている。本稿ではこの取り組み、特に本学に隣接する地域の公立学校と連携した取り組みについて紹介する。教員養成系大学が地域の将来を支える教員を育てることを目的の1つにしていること、また、多様な子どもがいる公立学校での実習体験がきわめて重要であることから、本学では附属校以外の公立学校での実習も重視している点が背景にある。

## 東京学芸大学での取り組み

### □ 全学的な取り組み

本学では、教育の情報化に対応できる教員の養成を目的として、高校情報の教員を育てることを1つの目的とする情報教育課程に加え、小学校の教員を養成する初等教育教員養成課程に情報教育選修(他大学での学科に相当)を2010年度に開設した<sup>4)</sup>。本学では小学校教員の養成も教科ごとに分かれての専門教育を行っており(ピーク制)、情報教育選修はICT活用や情報教育を先導できる教育の情報化のエキスパート教員を育成している。

これと並行して、全学生が1年次に履修する科目“情報処理”の内容を、それまでのコンピュータ操作リテラシーを主とした内容から、高校普通教科情報を発展させた内容に変更し、名称も“情報”に変更した。

☆1 Information and Communication Technology : 情報通信技術

多くの大学で初年次に情報処理系の科目を置いており、教員養成系ではこの科目を免許法上の必修科目“情報機器の操作”に割り当てている。操作方法を教えることに主眼を置いた授業ではないため“情報機器の操作”に相応しい科目であるかという懸念もあったが、操作方法は大学教育レベルの“情報”を学ぶ過程の中で身に付けることができるはずと考えている。

また、初等中等教員を養成する課程の全学生が履修する“〇〇科と情報”（〇〇には各選修・専攻の教科名が入る）で、教育の情報化の基本事項を周知する内容を扱うこととし、教育の情報化の推進についての意識付けを行っている。

これらの全学教育に加え、情報教育選修では、教育の情報化の基礎を1年次の“教育と情報”で、その詳細を2年次の“授業におけるICT活用”、“情報教育概論”、“学校の情報化概論”で学び、ICT活用を始めとする教育の情報化の意義と実践するための知識を習得した上で、“授業観察演習”、“教育実習”、“教育情報化臨床”、“教職実践演習”といった授業で実践力をつける。

他選修では、ここまでの充実はないが、ICTに詳しい教員が各々の授業で扱うほか、情報教育選修と他選修の学生の教育実習時の交流をもって、ICT活用等の意義の理解を促そうと試みている。

## □ 教員養成機能の充実プロジェクト

本学教育実践研究支援センターでは、学生が教育の情報化を実地に学ぶ機会を増やすために、上記カリキュラムを補完するプロジェクトを実施している<sup>☆2</sup>。

まず、2011年度大学教育研究特別整備費によって本学附属小学校の1つである小金井小学校の全教室に電子黒板システムを設置し、また、2013年度からは特別経費および学内予算によって教育情報化相談員（一般的にはICT支援員と呼ばれている）を配置して、附属学校の教員が日常的にICT機器を利用できるようにし、教員のICT活用力向上を図った。その上で、3年次に附属学校で行う教育実習（基礎実習）で

☆2 <http://mc.u-gakugei.ac.jp/project/>



図-1 基礎実習におけるICT活用体験（上：情報教育選修の学生，下：他選修の学生）

のICT活用の指導を依頼した。実習の様子を図-1に示す。全学を対象としたICT活用の方法を指導する授業はないが、基礎実習が1名の指導教員に学生グループ（5～6名）が配当される形で行われることを利用し、各グループにいる情報教育選修の学生を中心とした学び合いによってICT活用を体験する機会を作り上げた。

## ■ 近隣地域の公立学校と連携したICT活用実践力の育成

### □ 応用実習におけるICT活用実践プログラムの概要

本学では3年次秋と4年次春の2回の教育実習を行うことが基本となっており、このうち4年次春の教育実習は都内の公立学校で行う（応用実習）。教員養成機能の充実プロジェクトでは、この応用実習でもICT活用実践力の育成をねらったプログラム





図-2 地域小学校における教育実習の様子

(応用実習における ICT 活用実践プログラム) を実施している。

都内の公立小中学校にも ICT 活用環境がようやく整い始め、大学からの働きかけをしなくても教育実習の中で ICT を活用する機会も増えてきている。しかし、ICT 活用の指導ができる教員はまだ少ない。本学近隣地域の公立学校の授業における ICT 活用環境は、各教室に大型モニタはあるものの、授業専用の PC やデジタル教科書の導入は学校によって異なり、十分とはいえないのが現状である。本プログラムでは、東京学芸大学・3 市連携 IT 活用コンソーシアムを組織する小金井市、小平市、国分寺市の協力校に電子黒板等の ICT 機器を貸し出し、教員に日常的に活用してもらった上で、教育実習での ICT 活用の指導を依頼するという取り組みを行っている。また、公立学校での教育実習で ICT 活用実践を積極的に取り入れることのメリットデメリットを検討することも本プログラムの目的の 1 つである。

本プログラムは情報教育選修の一期生が応用実習を行う年度に合わせて開始し、この春で 4 年目を迎える。貸し出せる機材数と、現場の ICT 活用を指導することへの負担感から、引き受けてくれる協力校を増やせず、プログラムに参加できる学生はごく少数に限られているが、それでも毎年 10 人弱の学生が参加している。

## □ ICT 活用環境

前述の通り、実習中に利用できる ICT 活用環境は学校によって異なる。大学からは 70 インチの液晶表示一体型電子黒板 (SHARP BigPad)、電子黒板用のノートパソコンと、指導者用デジタル教科書を提供している。この電子黒板を実習生の (指導教員が担任する) クラスに常設している学校もあれば、特別教室に置き複数の教員で共用している学校もある。

また、1 つの協力校には、筆者らが行っている共同研究にも協力してもらっており、学習者用端末 (iPad Air) 40 台と学習者用デジタル教科書も提供している。

## □ プログラムからの成果

実習の様子を図-2 に示す。2013 年度実習生の様子は本学広報誌 (2013 年夏号) の特集記事<sup>☆3</sup>でも紹介されている。

プログラムに参加した学生からは、参加したことのメリットは何かとの質問に対して、

- 電子黒板やタブレット PC に触ることができた (2014 年度実習生)
- ICT 機器を活用するという経験をさせてもらえた (2015 年度実習生)
- 児童用端末利用など普段あまりできないような授業の経験をすることができた (2015 年度実習生)

と、プログラムの最低限の目的が達成できたことを示す意見が得られた。また、

- ICT を活用した授業を考えられた (2014 年度実習生)

.....  
<sup>☆3</sup> <http://blog.bmoon.jp/pdf/tgu2013summer.pdf>

- ICT 機器の活用のさまざまな場面を考えることができた(2014 年度実習生)

- 授業のいろいろな展開を考えることができた(2015 年度実習生)

と、単に従来の黒板やアナログ教具に ICT 機器を置き換えるというだけでなく、機器利用による学習上の効果や指導の効率向上を目指しての授業の設計と実践を経験できたことや、

- ICT を使うと子どもが興味を持ってくれることを知った(2013 年度実習生)

- iPad と電子黒板を使って子どもの発表を視覚的にも表すことができた(2014 年度実習生)

- ICT の良さが分かった(2015 年度実習生)

と ICT 活用の効果を実感できたという報告をしている。さらに、教員になった後に、

- 今実際に授業作りをしてみても、電子黒板やタブレット端末があったら、こういうことをやってみたいということを考えるようになった(2014 年度実習生)

- 実際 ICT 機器がまったくない環境で授業をしてみても、この場面であつたら良かったのにと思うことがたくさんあります。それは、実習で使うという経験があつたからこそ感じることができるようになったと思つています(2015 年度実習生)

との意見を寄せており、本プログラムが教職に就いてからの ICT 活用実践に良い影響を与えていることが示された。

一方で、

- 使うための準備、使い方や何のために使うかなど考える時間が疲れる(2013 年度実習生)

- ICT 機器を活用する授業の本番で、ちゃんと機器が動いてくれるかという不安があつた(2014 年度実習生)

- 慣れるまでに時間がかかってしまった(2014 年度実習生)

- ICT 機器を活用した授業しかなかったもので、いざ、そのような機器がない環境での授業のイメージがつかない(2015 年度実習生)

と問題点を指摘する意見もあつた。最初の 3 つの意見は、貴重な実習の時間を ICT 活用を考えることだけに費やしてしまいかねないことを示している。

また、実習校からは、

- (指導教員から)ICT の使い方を教わってしまうと、(使い方の)幅が狭くなってしまうかもしれない

- 実習期間が短いため、試行錯誤の経験ができないとの意見があり、実習までに、基本的な使い方や活用の方法論を学んでおくことの重要性が改めて認識できた。

また、

- ICT 活用の利点(さまざまな特徴を持った児童への対応、授業の準備時間短縮による授業設計や評価を丁寧に行える)を実習で体感できることはよい

- ICT 活用を実践することで改めてアナログ的なアプローチの価値を再認識できる。ICT 活用のバランスを教師になる前に知ることは大切である

と、現職の教員からもこの取り組みの重要性を認める意見が得られた。その一方で、

- ICT 活用は授業をする力の上にあるものだから、実習でそれを学ぶことは難しい

との意見もあつたが、この意見に対して、

- ICT は黒板などの教具の 1 つであるから、実習でもそれがあつた前提で授業を考えるべきである

という意見もあつた。このように単に ICT 活用の是非ではなく、教員の育成方法にもさまざまな捉え方があることが分かり、その方法を検討していくことも重要であることが示唆された。

加えて、実習生からは、

- 実習先の先生方に、ICT 機器の活用のバリエーションが増えたと言ってもらえた(2014 年度実習生)

との意見が、実習校からは、

- 新しい考え方や機器の使い方を学生の方から吸収できるのはありがたい

- 実習生が ICT を上手に使っているとほかの教員にも刺激になる

との意見があり、協力校に対しても良い影響を与えられているようである。なお、

- 実習校が ICT 機器に対して積極的だったので、やりやすかつた(2015 年度実習生)

との意見もあり、実習校自体に理解がないと、実習で ICT 活用実践は難しいことがうかがえる。大



学と実習校との相互理解に基づいた連携が重要であることを改めて考えさせられた。

## □ 実習後の活動

本プログラムでは、実習後も実習校にボランティアとして引き続きかわり、教員による ICT 活用実践の観察や支援を行う活動も取り入れている。2014 年度実習生の 1 人は大学院に進学した後もボランティアを継続しており、2015 年冬からは当該学校で非常勤講師も務めている。学校からは、

- 学生ボランティアとして、次にやるべきことを考えて行動するので、「スーパー学ボラ」と呼ばれるなど、信頼度抜群

との意見があり、学部から大学院という長期間、実習とボランティアで学校に入ることが、学生と学校両方にとって良い効果が得られることが示された。

## 今後の展望

前述の通り、教育実習での ICT 活用実践を通じた教育の情報化に対応できる教員の養成の取り組みの有効性は確認できた。その成果と課題について

では、本学における関連授業に反映していくとともに、今後より多くの学生が実践できるように実習校との連携を進めていきたいと考えている。また、この取り組みが地域の学校における教育の情報化の進展にもつながることを期待している。

## 参考文献

- 1) 文部科学省：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(中間まとめ)。
- 2) 豊田充崇 他：「教育の情報化」に関する附属小学校との連携事業報告，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，Vol.16, pp.37-42 (2006)。
- 3) 藤井善章 他：附属学校での ICT 活用の広がり，信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，Vol.15, pp.21-30 (2014)。
- 4) 加藤直樹 他：教育の情報化を先導できる小学校教員の養成カリキュラム，日本情報科教育学会第 3 回全国大会講演論文集，p.46 (2010)。

(2016 年 5 月 8 日受付)

藤原 裕 fujiyu@u-gakugei.ac.jp

東京学芸大学初等教員養成課程（理科）卒業。小学校教員を経て小学校教頭・校長を歴任。退職後小平市教育委員会勤務の傍ら私立大学や東京学芸大学で非常勤講師を兼任。2013 年より東京学芸大学教育実践研究支援センター特命教授。附属学校・地域学校連携の研究と実務、および学生指導に従事。

加藤直樹（正会員） naoki@u-gakugei.ac.jp

1999 年東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程修了。2004 年から東京学芸大学教育実践研究支援センター助教授／准教授。博士（工学）。ペン入力を採用したインタフェースのデザインやシステムの開発、および教育の情報化に関する研究に従事。



# 情報科教員を目指す学生さんに向けた ガイダンス会—情報教育に資する人材のつながる場所に—

谷川佳隆

千葉県立八千代東高等学校

## ガイダンス会発足の経緯

2003年度から高等学校において新しく情報科がスタートした。情報科が始まるにあたって現職教員が研修で免許を取る事となった。そして、情報科が始まったが、新たに情報の担当者を採用する都道府県は多くなかった。

そのような状況の中、毎年採用があった神奈川県では、神奈川県立神奈川総合高等学校の五十嵐誠教諭が、2007年から2012年まで所属していた神奈川県立横浜清陵高等学校で、神奈川県立高等学校で情報科の教員を目指す学生に向けたインターンシップ<sup>☆1</sup>を毎年夏に開催してきた。

だが五十嵐教諭が神奈川県立横浜清陵高等学校にいつまでも在職できるわけでもなく、転動したらインターンシップを存続することは難しいという相談を本会「会員の力を社会につなげる」研究グループ<sup>☆2</sup>（以後SSR）が受けた。

情報科の教員として新たに採用されるには多くの条件を満たす必要がある。そのような状況にもかかわらず情報科で教員を目指す学生さんたちを応援していく場を今後も設けることが必要であることをSSRで話し合い、神奈川県に限らず情報科教員を目指す学生を応援すべく、2013年に「情報科教員を目指す学生さんに向けたガイダンス会（以後ガイダンス会）」が発足した。

☆1 <https://www.ipsj.or.jp/magazine/9faeag0000005a15-att/5403peta.pdf>

☆2 <https://www.ipsj.or.jp/magazine/9faeag0000005a15-att/5401peta.pdf>

## 今までのガイダンス会について

今まで4回のガイダンス会を年に1回、日曜日の午後を利用して開催してきた。

### □ 第1回目

第1回目は2013年3月10日に五十嵐教諭の勤務する神奈川県立横浜清陵高等学校で開催された（図-1）。参加者は合計30名で、今まで五十嵐教諭が築きあげてきた人脈のおかげで多くの学生、高校の教員、大学関係者が参加した。概要は以下の通りである。

- 東京や千葉の現役の先生からの情報科や普通科の現場の様子の説明
- 神奈川の新採用の先生からの採用試験体験談などの紹介
- スクイーク Etoys<sup>☆3</sup>による体験授業

☆3 <http://etoys.jp/squeak/squeak.html>



図-1 第1回ガイダンス会の様子





図-2 第2回ガイダンス会の様子

新採用の先生方からはどのような形式で採用試験が行われたのか、採用試験での模擬授業ではどのようなことを実施したのかなど具体的な話を聞くことができ、情報科を目指す学生やそれを指導する大学教員には貴重な情報となった。

#### □ 第2回目

第2回目は2014年3月1日に小原格主幹教諭の勤務する東京都立町田高等学校で開催された(図-2)。告知が直前になってしまったため参加者は合計14名と少なかった。概要は以下の通りである。

- 自己紹介(学生)
- 新採用の先生からの採用試験体験談の紹介と現職教員との意見交換
- 情報科教員としての道を歩むにあたって、校内のお仕事
- 現職教員によるデモ授業

参加された人数が少なかったこともあり、率直な意見交換ができた。情報科の教員としてどんなことを心がけていくとよいかなどの情報交換ができた。

#### □ 第3回目

第3回目は、2014年10月05日にその当時滑川敬章教諭(現千葉県総合教育センター研究指導主事)の勤務する専門学科「情報科」が設置されている



図-3 第3回ガイダンス会の様子

千葉県立柏の葉高等学校で開催された(図-3)。参加者は合計19名であった。概要は以下の通りである。

- 先輩教諭による問題解決の授業事例の紹介
- 自己紹介
- 先輩教諭3名からの採用試験体験談
- 意見交換

専門学科「情報科」を設置している高等学校で開催することができ、専門学科のある学校の一例を知る機会となった。新採用となった先輩教諭が共通教科情報でどのような授業を展開しているか紹介ができ、情報科を目指す学生に具体的なイメージを伝えることができた。

#### □ 第4回目

第4回目は、2015年10月4日にその当時久野靖教授(現電気通信大学)の勤務する筑波大学東京キャンパスで開催された(図-4)。参加者は合計24名であった。概要は以下の通りである。

- 自己紹介
- 講演「情報科教員を目指すにあたって」  
文部科学省教育課程調査官 鹿野利春様
- 先輩教諭4名からの採用試験体験談
- 意見交換

今回の会場は高等学校ではなく交通の便の良い大学のキャンパスをお借りできた。そして、文部科学省教育課程調査官 鹿野利春様から講演をい



図-4 第4回ガイダンス会の様子

ただくことができた。新教育課程の実施になると共通教科情報が2科目から1科目になる。それに向けて、どのような準備が必要なのかなどのお話を伺うことができた。

## ガイダンス会の成果と問題

### □ 成果

これまで計4回行ってきたが、情報科の教員を目指す学生にとって貴重な体験談などの情報を得る場になっている。数少ない情報の教員を目指す学生の横のつながりの場を作れることの意義は大きいと感じている。

4回のガイダンス会に参加された人数の内訳は表-1の通りである。合計で延べ87名が参加している。

### □ 問題

ガイダンス会を実施する上で、以下のような問題点が挙げられる。

まずは、誰が主となって主催するのか。SSRのメンバが固定化していることとメンバが少ないので、話し合い協力しながら開催されてきた。

次に、開催時期。開催時期については第3回目から後期の大学の授業が始まった後の10月の第1日曜日と固定している。

その次に、ガイダンスの会場。高校現場だと交

回	学生	高校教員	大学職員等	その他
1	12名	11名	7名	
2	2名	8名	3名	2名
3	5名	7名	4名	3名
4	7名	11名	4名	2名

表-1 ガイダンスの参加者数内訳

通の便が不便なこともあり、大学を第4回目の会場とした。今後もどこに協力をいただくかという事で会場を決めるのも苦労する。

そして、ガイダンスの内容。3回目までは模擬授業等を行っていたが、情報科の教員に求められていることが変化していることもあり、第4回目は講演と情報交換を主とした。

何よりも学生への告知。学生への告知についてはWebサイト<sup>☆4</sup>から情報発信をしているが、学生へどこまで届くのが未知である。情報科の教員養成にかかわっている大学の先生方とのさらなる連携が必要となる。

## 今後に向けて

文部科学省生涯学習政策局情報教育課長と文部科学省初等中等教育局教職員課長より2016年3月3日付で「高等学校情報科担当教員への高等学校教諭免許状「情報」保有者の配置の促進について(依頼)<sup>☆5</sup>」を発表している。その中で、情報科を担当できる教員の数、専任約2割弱で兼務約5割強や免許外約3割弱いるという調査結果を発表し、情報の免許を保有者の配置の促進に努めるように各都道府県教育委員会人事主管課長等に通達している。このことから、これから情報科の教員の採用が始まるか増えていくことだろう。そのときこのガイダンス会のことを知れば、参加を希望する学生が増えるであろう。また、このガイダンス会での活動は参考になり、各地でこのガイダンス

☆4 <http://www.ipsj.or.jp/sig/ssr/>

☆5 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1368121.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1368121.htm)



(1) 情報社会の問題解決
(2) コミュニケーションと情報デザイン
(3) コンピュータとプログラミング
(4) モデル化とシミュレーションの考え方
(5) 情報通信ネットワークとデータの活用

表-2 情報Ⅰ（仮称）の項目

会のようなものが開催されるようになるかもしれない。

第4次産業革命といわれるように、高度な情報通信技術が社会の在り方を変えていく中、情報科の教員に対する期待は大きなものになっていくことだろう。また、教育課程が変わり共通教科情報が2科目から1科目に、そして情報Ⅰ（仮称）と情報Ⅱ（仮称）<sup>☆6</sup>に大きく変わろうとしている（表-2）。

その情報科教員を目指す方々を応援し学生をつなげる場所として、このガイダンス会は役割が大きいと感じている。そしてこのガイダンス会を続けていくことの重要性も感じている。

<sup>☆6</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/059/siryu/\\_icsFiles/afiedfile/2016/03/17/1368104\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/059/siryu/_icsFiles/afiedfile/2016/03/17/1368104_1.pdf)

## 予告

今年度（2016年度）もガイダンス会を開催する。

第5回目は、2016年10月2日<sup>☆7</sup>に予定している。開催会場は現時点（2016年5月1日）では未定であるが、概要は決まっていて4回目とほぼ同じ予定である。以下の通りである。

- 自己紹介
- 講演「情報科教員を目指すにあたって（仮）」  
文部科学省教育課程調査官 鹿野利春様
- 先輩教諭からの採用試験体験談
- 意見交換

今回も文部科学省教育課程調査官 鹿野利春様に講演をしていただけることになっている。

情報科教員を目指す学生さんと関係する大学の先生方、それに高校現場の先生、そしてこのガイダンス会に関心を持っていただける方、多くの方の参加を心待ちにしている。そしてこのガイダンス会に協力していただける方をお待ちしている。

<sup>☆7</sup> <https://www.facebook.com/events/1694983724103717/>

（2016年4月30日受付）

谷川佳隆（正会員） [y.tnkw@chiba-c.ed.jp](mailto:y.tnkw@chiba-c.ed.jp)

SSRメンバ、情報科・数学科を担当する高校主幹教諭。現在（2016年）、千葉県立八千代東高等学校勤務。



- 【解説】情報科教員を目指す学生さんに向けたガイダンス会 -